



	感じる・ 気付く力	うごく力	考える力	やりぬく力	人とかが わる力
32 幼虫の変身!	●		●		●
33 こうやると、紙飛行機よく飛ぶよ	●		●		●
34 カニ歩きだったら登れるよ		●		●	
35 ニンジンの葉っぱは、ニンジンの味の匂い ~地域との交流~	●		●		●
36 水を入れてみると…	●		●		
37 もう一本、またもう一本…水はうまく流れるかな	●		●	●	
38 負けてばかりはいや		●	●		●
39 こんな形の氷ができたよ	●		●		

幼虫の変身！

【活動の様子】

5月中旬ごろから、ツマグロヒョウモンチョウの幼虫を飼育し始めた。飼育ケースの中にいる5から6匹の幼虫の中には、すでにサナギになっているものもある。

そろそろ羽化が始まるかもしれないと思い、飼育ケースをよく見える場所に移動した。

ある朝、「アオムシが逆さになっとるよー！」と、A児が発見し伝えに来る。見に行ってみると、飼育ケースの上部でぶら下がっている幼虫がいる。

「ほんまじゃ〜」、「サナギになるんじゃない？」などと、ワクワクしながら子供たちは、様子を見守っている。



しばらくすると、「来て！幼虫が！！」と、A児が慌てた様子で呼びに来る。保育者が周りの子供を誘って見に行くと、ちょうど幼虫からサナギに変化している。「うわ〜。クネクネしようる！」、「赤茶色の服着ようるよ！」と、サナギの変身の様子を見ながらつぶやいたり、「頑張れー」と、サナギになるのを応援したりしている。「こんなんして動きようるね」と、幼虫の動きのまねをする様子も見られる。

幼虫は、最後に全部の皮を被ると、黒のトゲトゲのかたまりを下に落とす。「あっ何これ？」、「うんち？」、「違うよ。いらん服脱いだんじゃない？」など、それぞれが感じたことや気付いたことを口にする。「いつチョウチョになるかね？」、「明日なるかな？」などと、これからどうなるか話もしていたので、あとどれくらいでサナギからチョウになるかを、カレンダーに記録することにする。その日から、「そろそろチョウチョになるかね」など、子供同士でチョウチョになる日を楽しみにする姿が見られるようになる。

感じる・気付く力

うごく力

考える力

やりぬく力

人とかわる力

【遊びの中で育まれている力】

子供たちが興味を持って生き物に関われるようにしたい。飼育ケースを子供たちの目に付きやすい場所に置いておこう。

- これまでの幼虫の様子と違うと感じる。【感じる・気付く力】
- 幼虫の変化の面白さを興味深く見守っている。【感じる・気付く力】

幼虫がいつもと違う様子に気付いている。子供の驚きや発見を受け止め、共感したり、他の子供たちにも知らせたりしよう。

- よく見る・触るなどの諸感覚をフルに活用する。【感じる・気付く力】
- 生命の尊さ・神秘さ・不思議さを感じる。【感じる・気付く力】
- 幼虫の動きや変化について、思ったこと、感じたことなどを言葉や身体で表現する。【人とかわる力】
- 次にどう変化するかと先を想像したり、いつチョウになるのかという期待を持ったりする。【考える力】

幼虫からサナギへの変化の様子を見る中で、それぞれ自分なりに気付いたことがあり、友だちと共有し合うことで、新たな発見につながっている。これからどのような変化をするのか、子供たちと一緒に見守っていこう。

- サナギからチョウになるまでの期待がさらに膨らんでいる。

この遊びの中での学びを支えたもの

【生き物を身近に感じられる環境】

生き物を探したり捕まえたりすることは楽しんでいるが、扱い方や飼い方にはなかなか興味向かないことも多かった。そこで、飼育ケースを子供の身近なところに置いてみたところ、毎日様子を見たり世話をしたりすることを通して親しみや愛着が生まれ、幼虫の細かい変化にも気付いていった。

【羽化の瞬間に出会うことができる状況作り】

見つけた生き物を飼育コーナーに置いておくだけでなく、幼虫からサナギに変化するタイミングを捉えて子供たちの目が届く場所に置いたことで、サナギになる瞬間を一緒に見ることができた。子供たちは羽化の様子を間近で見て、驚いたり喜んだり感動したりして、命の不思議を感じている。蛹化、羽化と、昆虫の成長の過程を目の当たりにすることで、科学的な好奇心や探究心が育まれていく。

【保育者の生き物に対する親しみ】

保育者がツマグロヒョウモンチョウに親しみを持って関わったり、世話をしたりする様子を見ることが、子供たちが生き物に興味を持つきっかけとなり、生き物に親しみを感じるようになった。

【保育者や友だちとの発見や気づきの共有】

子供たちは、ツマグロヒョウモンチョウの変化や成長の様子を見て、「クネクネしようる!」、「赤茶色の服着ようるよ!」と、見たことを自分なりの言葉や動きで表している。保育者や友だちと一緒に観察し、感じたことを言葉にして共有し合うことが、新しいことに気付いたり、不思議さや驚きを発見したりすることにつながっている。

先生方へ…



勢いよくキャベツを食べ動き回っていた幼虫は、ある日動かなくなりサナギになります。すっかり変わった姿に子供たちは不思議そうに見入りますが、さらに、羽化してチョウが誕生する瞬間に出会うことで、子供たちは驚き心を大きく揺さぶられることでしょう。これまで知っていたチョウへの認識が大きく変わる出来事は、子供たちの心に深く刻み込まれ、命の不思議や生命の営みを深く実感する経験となります。

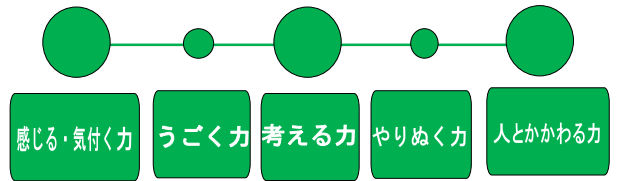
これらの貴重な体験を支えたのは、子供たちが体験し学ぶであろうことを見通し、保育者が意図的・計画的にその機会を作ったことです。また、保育者自身が幼虫を慈しみ大切に育てる姿から、子供たちも愛着を持ち、よく見たり一緒に世話をしたりする状況が生まれたのでしょう。

都市化が進む中、子供たちの自然離れが進んでいますが、保育者が自然を園内に持ち込み、その不思議のドアを開く役目を果たしていきたいものです。中には生き物と触れ合うのが苦手な子供もいると思われませんが、無理強いせず、まずは保育者や他の子供が生き物と一緒に楽しく遊んでいる様子を見せ、安心感を持てるようにしましょう。また、あらかじめ調べたり専門家に聞いたりして、保育者が飼育についての見通しを持っておくことで、子供たちの興味・関心に寄り添うことができ、見通しを持って体験や学びを上げたり深めたりすることができるのではないのでしょうか。

事例 33

4歳クラス
(5月)

こうやると、紙飛行機よく飛ばよ



【活動の様子】

A児が紙飛行機を作って遊んでいる。

A児の姿から、紙飛行機作りに興味を持つ子供が増え、色々な紙飛行機を絵本や図を見ながら作り、廊下で紙飛行機飛ばしを楽しんでいる。

ある日、A児が家から形の違う紙飛行機を持って来る。その紙飛行機が遠くまで飛んでいるのを見て、B児とC児も「同じのを作りたい」と、A児や保育者に聞きながら作り始める。

同じものを作ってもなかなかうまく飛ばない。A児が「こうやるとよく飛ばよ」と飛ばし方を見せ、B児とC児が見よう見まねで飛ばす姿が何日も続く。

A児にアドバイスを受けながら何度も試す中で、片足を後ろに引くこと、思いきり腕を振ると飛ばよようになることに気付き、毎日繰り返し遊ぶ。日に日に飛距離が伸びていき、隣のクラスまで飛ばよようになる。

その後、保育室に置いている飛行場の図鑑から、飛行機の仕組みや、飛行機が滑走路を走り離着陸することを知り、関心を示している姿が見られるようになる。そこで、保育者が廊下に目盛を付けた滑走路を用意すると、さらに紙飛行機に興味を示し、意欲的に紙飛行機を飛ばすようになる。自分が目標としている位置まで飛ぶと「見て、7までいったよ」と喜ぶ姿が見られる。

後日、地域の紙飛行機名人を招き、紙飛行機の折り方や飛ばし方について教えてもらったことで、紙飛行機への興味関心がさらに深まりクラス全体の遊びへとつながっていった。

【遊びの中で育まれている力】

- A児は、絵本や図を見ながら、紙飛行機を見本通りに折り、自分で折れたという達成感を感じる。
- 他の折り方があることに興味を持つ。【感じる・気付く力】
- B児とC児は、友だちの良さを認め、折り方を聞く。【人とかがわる力】

どのようにしたら遠くまで飛ばよかと投げかけ、みんなで考える時間を確保しよう。

- B児とC児は、同じものを作っても飛ばないことに疑問を持ち、いろいろな飛ばし方があることが分かる。【考える力】
- 友だちに飛ばし方を教えてもらい、何度も繰り返しやってみる。【人とかがわる力】
- 飛ばすときのポーズ、腕の振り方、強さに気付く。【感じる・気付く力】

飛行機について興味や関心を持って調べることが出来るように、いつでも目の届く位置に図鑑を配置しておく。

距離を飛ばすことへの興味がわき、遊びが発展するように目盛付きの滑走路を用意しておく。

- 目標まで飛ばせたという達成感を感じる。
- 数を意識しながら、より遠くまで飛ばせるように何度も飛ばす。【考える力】



この遊びの中での学びを支えたもの

【遊びが深まる環境の再構築】

自由に紙飛行機が作れるよう、作り方の本や図、紙を用意したり、大事な紙飛行機を保管する場所を設けたりした。また、飛行機の仕組みに気付くことができるよう図鑑を用意する、紙飛行機を高く遠くへ飛ばすことができるよう飛ばす方向に目的物を配置する、遠くへ飛んだことが一目で分かるよう滑走路を作るなど、環境を整えていったことで、遊びがより深まっていった。

【飛距離に対する興味】

滑走路に数字で目盛を付けたり、着地点に印を付けたりしたことで、子供たちは、紙飛行機をより遠くに飛ばすという目的が持てた。このことが、目標に向かって、自分なりに飛ばし方を試行錯誤する楽しさを味わい、楽しみながら競い合う姿につながった。

【地域の教育力を生かした保育】

紙飛行機名人を招き、紙飛行機を飛ばす時の腕や肩の動きは、ボールを投げるようにではなく、槍を投げるイメージで飛ばすとよいこと、そのためには、新聞紙を棒状にし遠くへ飛ばす練習をするとよいことを教えてもらった。子供も保育者も、名人ならではのコツを教えてもらい、紙飛行機を飛ばすことへの興味が膨らみ、成功体験を繰り返すことで、さらなる意欲につながった。

先生方へ…



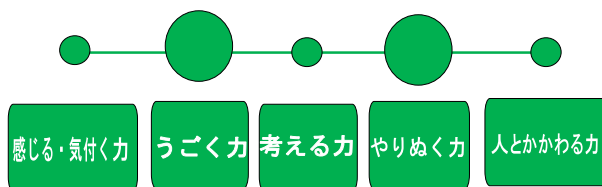
子供たちが自由に紙飛行機を作れるようにと、保育者が紙飛行機コーナーを作ったことで、子供たちは様々な紙飛行機を自分たちで作り、飛ばすことを楽しむようになっていきました。その姿から、保育者が、廊下を滑走路に見立て印を付けるなどの環境を工夫したことで、子供たちは友だち同士で飛距離を競う遊びを楽しむようになっていきます。さらに、飛行機の図鑑や絵本をコーナーに置くことにより、子供たちは飛行場作りにも興味・関心を広げています。

この事例のように、保育者が子供たちの遊ぶ姿から、様々な環境を整え、再構成を繰り返す度に、遊びがより深くなっていきます。

一人で図を見ながら紙飛行機を折ることや、紙飛行機を飛ばすことによって飛距離を印で確認することで、子供は遊びの中で形や数を認識しています。この経験は小学校以降の図形や数の概念の習得にもつながっていきます。また、地域の紙飛行機名人に来ていただき、体全体で紙飛行機を飛ばすコツを教える中で、腕や肩の動かし方など、自分の体をコントロールするうごく力も育まれ、紙飛行機の遊びがよりダイナミックになっています。地域の教育力を保育に生かすことは、より豊かな遊びの広がりにつながります。



カニ歩きだったら登れるよ



【活動の様子】

5月中旬のこと。新入園児のA児は、今まで戸外で遊ぶ経験が少なかったようで、斜面を登るのが苦手だった。

ある日、斜面の上まで行こうとしている他の子供について「Aも行きたい！」と仲間に入ろうとする。そこで、始めは保育者が一緒に手をつないで登ることにする。途中から坂はさらに急になり、手をつないでいては登れなくなってくる。保育者が手を離すと「自分じゃ登れん。もう怖いから行かん！」と、A児は言い始める。「登るって決めたのはAちゃんだから、最後まで登ってみようよ！」と言っても、「登れないの！」とA児は言い返す。それを見ていた子供が「Aちゃんできるよ」と顔を覗きこみながら励ます。保育者もA児の後ろに回って「Aちゃんが落ちこちそうになったら、絶対に捕まえるから、登ってごらん！」と声をかける。するとA児はようやく手をついて登り始める。土が気になるのか時々てのひらを見ては、何とか斜面の上まで登りきる。

A児は、5月の下旬にも、始めはくじけそうになりながら、友だちに応援してもらって、急な坂を登る経験をした。6月になり、坂の上で子供たちが遊んでいると、下から「先生～！」とA児の呼ぶ声が聞こえてくる。「Aちゃん、お～い！」と手を振ると、何か言いながら自分で坂道を登ってくる。「わあ～Aちゃん、できないって言わずに自分で登ってきたんだね！」と言うと「Aね～、カニさんになってるんだ。カニ歩きだったら、一人で登れるんだよ」と両手をカニのハサミのようにして、ユラユラと揺らしながら、一步一步進んでいく。滑りそうになるとカニの手を下ろし、横歩きのままゆっくりゆっくり登って行ったA児は、一旦保育者の方を見て、そのまま嬉しそうに笑いながら友だちのいる砦へ走って行く。

【遊びの中で育まれている力】

- 登りたいという気持ちが芽生えている。

今のA児が自分の力で登ることは難しいだろうが、A児の中で生まれた意欲を大事にしたい。

- 思い通りにならない困難さを経験している。【やりぬく力】

今までも途中で諦め、投げ出すことが多かったA児。今回は自分がやりたいと言ったことを、最後までやり通す機会になってほしい。

- 友だちの励ましに勇気をもらう。

失敗しても大丈夫なことを伝えることで、安心して取り組んでほしい。

- 自分でやってみようとする気持ちが生まれる。【やりぬく力】
- 体の使い方を体得する。【うごく力】
- 登り切った達成感を味わう。【やりぬく力】

- 自分の力で登った経験が、自分の中で「できる」という自信になっている。【やりぬく力】

A児の取組を受け止め認めることで、さらに自己肯定感を高めてほしい。

- 自分の力で登れるように、しゃがんで体を低くし、斜面に向かって横に進むという自分が登りやすい方法を考え、登っている。【うごく力】
- 自分のしたいことに向かってしなやかに体を動かす。【うごく力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【全身を使った身のこなしを習得するための環境】

斜面という環境があることで、子供たちは全身を使って、そこに向かっていくことができる。斜面はデコボコがあったり滑ったりするために、簡単に登れないこともあるのだが、だからこそ子供たちの全力の関わりを導き出し、身体の調整の仕方などの微妙な身のこなしを体得することにつながっていった。

【自分なりのペースで身に付けていく過程の確保】

A児は、始めは恐れて全く登ろうとしなかったが、保育者や友だちに支えられながら、次第に自分から登りたいという気持ちを高めていった。そして、最終的には自分なりに自信を持って登ることができる登り方を見つけていった。本人の意欲を大事にしつつ、その子なりに身に付けていくペースを大事にして、見守っていく過程があったからこそ、結果としてA児は自分の力で登ることができるようになった。

【友だちや保育者の存在（共感や応援）】

A児が始めに登りたいと思ったのは、自在に登っている友だちの姿を見て、他の子供たちのようになりたいという憧れの気持ちがあったからであろう。そして、実際に登ることが困難になった時には、友だちが応援してくれたり、保育者が見守り安心感を与えたりすることで、登ることを実現している。このように友だちや保育者の存在があり、共感や応援があったことが、A児が諦めずに取り組むことを支えた。

先生方へ…



子供たちは、失敗しながらも崖上りに何度も挑戦する中で、滑りやすい場所で足を踏ん張る動きや、地面をしっかりとつかむように立つ動きなどを繰り返し、体の動きを調整しながら次第に全身の使い方やコツを習得していきます。その中で、バランス感覚や体幹が養われていきます。

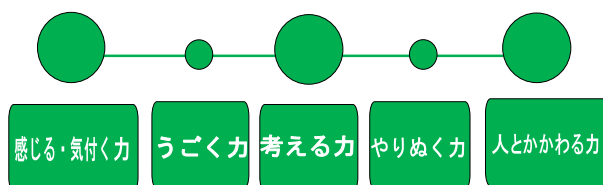
この事例では、友だちの励ましと、「Aちゃんが落ちそうになったら、絶対に捕まえるから、登ってごらん!」と、安心して挑戦する気持ちを起こさせた保育者の言葉かけが、この遊びを支えています。そして、「できないって言わずに自分で登ってきたんだね!」と、やり遂げた頑張りを認めることが、子供の自己有能感を育てています。この保育者の関わりが心の安定につながり、自分がやりたいと思うことに向かって心を弾ませ夢中になって遊ぶ中で、次第に自分らしさを発揮し、生き生きと体を動かしながら、自然に様々な体の動きを身に付けていくことができました。

このように、自ら考えて登り切った達成感を味わう経験は、苦手なことにも向かっていく力、やりぬく力を育てていきます。

事例 35

4歳クラス (6月)

ニンジンの葉っぱは、ニンジンの味の匂い
～地域との交流～



【活動の様子】

園の近所の方の御厚意で、畑にできた野菜や果物を収穫させてもらっている。

今回はニンジンの収穫のお誘いがあった。子供たちに、夏まつりのカレーに入れるニンジン収穫させてもらうことを伝えると、「ニンジン入れる袋がいる」と張り切って準備をし、畑まで歩いていくことになった。

畑に着くと、いろいろな野菜が植えてある。おじさんに「どれがニンジンか分かるか？」と聞かれた子供たちは、畑の野菜を見渡すが、畑にできているニンジンを見たことがないようで、土の下に少し見えているニンジンに気付かない。ピーマンやトマトのように、茎に実が付いていると考えたようだ。

おじさんに「これがニンジンの葉っぱじゃ。引っ張ってみ」と言われて、葉を握るとニンジンが見え、「見て。この葉っぱ、ニンジンの葉っぱじゃ」と喜んで抜き始める。

「匂いがする」、「ほんまじゃ。なんか臭い」と葉から匂いがすることに気づき、てのひらをかいている。「葉っぱも、ニンジンの味の匂いがする」とニンジンの葉からニンジンの味（匂い）がすると驚いている。

収穫したニンジンを見て、「家にあるニンジンと違う」と言う子供がいたので、保育者がどこが違うか尋ねてみる。

「毛がいっぱいある」、「ザラザラしとる」、「色がちょっと違う」、「とんがとる」など気付いたことを言い合っていると、一人の子供が「ニンジン嫌いじゃけど、おじちゃんのニンジンはおいしいかもしれん」と言う。「いつも見るニンジンと違うから」という理由である。

この言葉を聞いておじさんは「自分で掘ったニンジンじゃけえ、おいしいぞ。野菜も食べんと大きくならんぞ」と笑っている。

「じゃあ、夏まつりのカレーのニンジンはおいしいな」と子供たちは納得して「おじさんも夏まつりに来てね」とお誘いし、保育所に帰る。

【遊びの中で育まれている力】

- ・ニンジンの収穫に期待を持ち、畑に行く。

今までの経験から、いろいろなことを教えてくれるおじさんに親しみを持ち、畑に行くことを楽しみにしている様子が感じられたので、おじさんとのやりとりを見守っていく。

- ・畑になっている野菜を見て、ニンジンがどれかを考える。【考える力】

子供とおじさんのやりとりから、ニンジンが土の中にできることに気付くよう、期待して見守ろう。

- ・収穫体験を通して、諸感覚を使い、いろいろな気づきを伝え合う。【感じる・気付く力】【人とかかわる力】

一人の気づきに具体的に問いかけることで、周りの子供に気づきが広がると考えた。

- ・ニンジンについて、知っていることや感じたことを伝え合う。【考える力】【人とかかわる力】

- ・いつも見るニンジンとは違う形や色だったから、味も違うかもしれないと想像する。【考える力】

- ・収穫したニンジンを使ったカレーをおじさんと一緒に食べたいと期待する。【人とかかわる力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【自然物に触れる体験】

地域のおじさんの畑にあるニンジンを初めて見た子供たちには、同じニンジンでもスーパーで買ったニンジンとは違って見えた。

実際に収穫を体験することで葉の付いたニンジンに驚き、そこに保育者が共感していくことで、子供たちは、感じたこと、気付いたことなどを伝えたいという思いになった。そして、友だちが発見したことに触発されたことで、また新たな気付きや発見が生まれていった。

先生方へ…



地域の中で、子供たちは様々な人と触れ合い、家庭や園・所などではできない経験をしています。

ここでは、プランターや小さな菜園では経験できないような畑で、収穫を通して、子供たちは、畑を作っているおじさんだからこそ知っていることを教えてもらったり、触れ合ったりしながら、家族以外の人との関わりを経験しています。

また、いつもと違う環境の中では、新たな驚きや発見も生まれるでしょう。地域に出向き自然に触れる体験をすることは、子供の多様な感じ方や気付きを引き出していくと考えます。

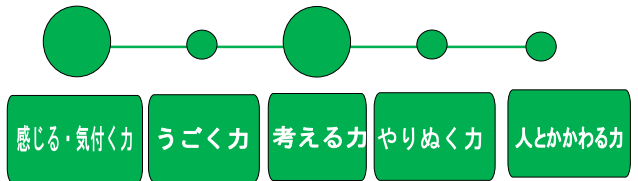
少子化、核家族化の現状の中、家族以外の地域の人たちの温かいまなざしに見守られながら、子供たちが成長していくことは、とても大切です。このような活動を通して地域とのつながりを作っていくことは、園・所等の大きな役割ではないでしょうか。



事例 36

4歳クラス
(6月)

水を入れてみると…



【活動の様子】

4月から入園してきたA児（4歳）は、砂場で遊ぶ経験が少なかったが、園生活にも少しずつ慣れ、土や水、泥に興味を持ち始めたところである。

この日も、A児は夢中で水や泥で遊んでいたが、園庭でおもちゃの片付けをしていた時のこと、バケツの中に入れた泥が固くなり、なかなか思うように出せない。A児は、バケツの中に手を入れ、泥を出そうとしたが、出てこない。今度は、スコップでかき出そうとするが、やっぱり固くて取り出せない。

そこへA児の様子を見ていたB児（5歳）がやってきて、「水道で水を入れたら、泥が出やすくなるよ」と教えてくれる。「え、ほんと？」と、少し信じられない表情ではあったが、普段から年長組に憧れているA児は、水道のところまで行き、様子を見ながらバケツの中に水を入れる。A児は、固くなっている泥に水が染み込んでいく様子を見ながら、さらに水を入れていく。すると、今まで固くなっていた泥がだんだんやわらかくなっていく。最後に、バケツを思いっきりひっくり返してみると、泥が出てくる。

A児は、「ほんとだ！」と驚き、嬉しそうな表情で、教えてくれたB児や周りにいる友だちに、泥を取り出すことのできたバケツを見せている。それを見ていた周りの友だちも「やったね！」と嬉しそうにしている。

【遊びの中で育まれている力】

泥や水の感触をしっかりと楽しんでほしい。

- A児は、ドロドロの泥の感触を楽しんでいる。【感じる・気付く力】
- バケツの中の固くなった泥を、A児の知っている方法で何とか出そうと試している。【考える力】
- A児は、自分の力で簡単に出すことができず困っているが、諦めずに試行錯誤を繰り返している。【考える力】

A児は砂や水、泥に興味が出てきたところだったので、自分でチャレンジしてほしいと思い、様子を見守ることにした。

- 普段から憧れているB児の話に耳を傾ける。

B児がA児に教える姿を見守ろう。

B児が教えてくれたことを、A児が自分で考えて、やってみてほしい。

- B児の教えてくれたことを試してみようとする。【考える力】
- A児は、泥の様子を見ながら、水の量を調節する。【考える力】
- 固まった泥に水を入れると、柔らかくなることに気付く。【感じる・気付く力】

B児が教えてくれたことを試してみようとする姿を見守ろう。

- A児は、泥が取り出せたことを喜ぶ。
- 喜びを周りの友だちと共有している。

この遊びの中での学びを支えたもの

【土、水、泥を自由に楽しむことのできる環境】

土、水、泥に興味を持った時に、いつでも触れて遊べる環境を常に整えていた。また、興味を持って遊び始めた子供たちが、より楽しめるように、様々な用具を用意していた。このように、思いきりドロドロになれる環境を整えておくことで、夢中になって遊び、試行錯誤しながら、土、水、泥の感触の気持ちよさや楽しさを感じることができた。

【考えるきっかけを与えてくれる異年齢児の存在】

普段から遊びや生活の中で、年長児と関わることができるようにしている。試行錯誤しているA児の様子を見ていたB児が、自分の経験をもとに泥を出す方法を教えていた。A児にとって憧れのB児の言葉であったことで、自然に受け入れることができた。このことがA児にとって考えるきっかけとなり、泥をバケツから出すことにつながった。経験豊かな年長児と自然に関われる環境が、年中児の遊びを豊かにした。

【自分なりに試すことのできる場】

A児は、バケツから泥を出すために、自ら試行錯誤したり、B児が教えてくれたことを考えながら試したりしている。試す時間を十分に確保し、保育者になるべく声をかけずに見守ったことにより、A児は考えを巡らすことができた。このことが、A児の「自分で何とかやってみることができた」という達成感につながった。

先生方へ…



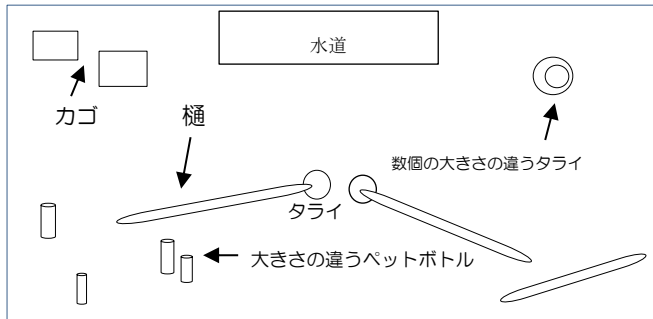
A児が、バケツの中で固くなった泥が取り出せなくて困っていると、年長児のB児が取り出す方法を教えてくれます。このことで、泥を取り出すことができたA児は、B児や友だちに泥を取り出すことのできたバケツを見せて大変喜びます。

泥を取り出す場面では、A児なりに手やスコップで試したり、水の量や泥の柔らかさを確認しながら取り出すタイミングを考えたりしています。これは、直接体験をしながら様々に考え、試している姿です。

このような直接体験は、思考力の芽生えを促しています。ものの性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりすることにより、考えたり、予想したり、工夫したりするなどして、多様な関わりを楽しみながら考える力は育まれていきます。

また、B児のアドバイスに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、A児は、考え直して、教えてもらったことを試みます。新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになるのです。体験を通しながら試行錯誤することの楽しさを、この時期にしっかり感じる事が、次につながる確かな力を身に付けていくのです。





【活動の様子】

子供たちが、水を流すことに夢中になっている。タライの上に1本の樋を置き、水を流し始める。1本流れると、近くにあったカゴの上にもう1本樋を並べる。再びうまく流れると、今度は、樋をおもちゃのカゴとタライの上に渡すように乗せ始める。2本目の樋をつなげて次のタライの上におくと樋の橋ができる。

すかさず水を汲んできて流す子供がいる。「やった!」というような、言葉はなかったが、自分たちの思っていたように流れたことに、思わずみんなで見合わせ、口元が緩んでいる。

「3本でもできる!」と喜び、さらにつないでいる。しゃがみこみ、ペットボトルを台にして、樋と樋の間をうまくつなごうとしているA児がいる。つなぎ目で水がこぼれると考えている。樋を支えるように立てたペットボトルが不安定でなかなかうまくつながらず、何度も何度も向きを変えてみる。高さがそろうように、樋の下で支えるペットボトルの大きさや数を変えている。

絶妙なバランスでつなぎ目の調整ができると、タイミングよく水を運んでくる子供がいる。「流すよ!」と、みんなに目で合図し、水が流れ始めると、子供たちは、流れの先をじっと目で追っている。最後まで水が流れると、どの子供の顔も満面の笑みになる。

【遊びの中で育まれている力】



- 水が流れることを楽しむ。
- 樋を増やしても、水が流れることをそれぞれが楽しむ。【感じる・気付く力】
- 流れることを喜び、長くしてみたらどうなるか工夫してみる。【考える力】

長くしてみようという展開が見られるので、高さも考えることができるよう、カゴを用意しておく。

- 友だちの意図を汲んで、水を用意し、タイミングを見計らって水を流す。【考える力】
- 互いに、表情、動き、雰囲気を感じながら協力し合う。【感じる・気付く力】
- イメージ通りに水が流れたという達成感を味わう。【やりぬく力】
- さらに長くしたらどうなるだろうかと工夫してみる。【考える力】
- A児は、つなぎ目で水がこぼれることを予測している。【考える力】
- ペットボトルが不安定なことにより、イメージ通りにうまくいかず、試行錯誤する。【考える力】

何度も挑戦している様子を見守ろう。



- イメージ通り水が流れたという達成感を味わう。【やりぬく力】

思いが実現できた達成感を共に喜ぶ。

この遊びの中での学びを支えたもの

【子供が必要に応じて選択できる環境構成】

水遊びが盛んになったので、たくさんの樋や、高さの違うカゴ、水を流すためのペットボトルなど、いろいろな道具を用意しておいた。そのことで、さらに水遊びが広がり、水の流れる法則性に気付いて、水を流すことを楽しんでいる姿が見られた。子供たちが欲しいと思う道具が用意されていたことにより、試したり、工夫したりすることを十分に楽しむことができた。

【たっぷり試行錯誤できる時間と場の確保】

保育者が手を出すのではなく、子供たちがどんなことをしたいと思っているのかといった思いを読み取り、それが実現できるよう用具を追加したり、時間を確保したりしたことで、子供たちが遊び込むことができた。

【一緒に同じ遊びをする友だちの存在】

友だちが水を流しているのを見て、その意図を感じ、水を汲んできたり、樋を支えたりと、それぞれの役割を見付けて協力し合っている。何度も失敗した後に、イメージ通り流すことができた喜びを、友だちと分かち合ったことで、達成感を味わい、さらに嬉しい気持ちになった。

先生方へ…



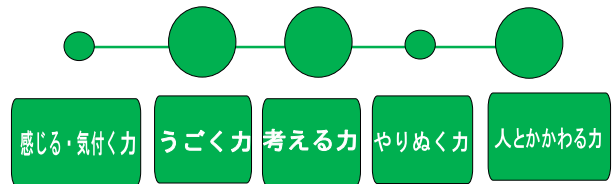
この遊びは、一本の樋に水を流し始めたことから遊びが広がっていきました。遊びは、一つのことをじっくり繰り返す遊びもあれば、このように次々と広がっていく遊びもあります。

遊びが広がる中で、A児は樋の継ぎ目で水が漏れないかを心配し、うまくつなごうと試行錯誤します。このような遊びでは、子供が環境との相互作用の中で感じるであろう「自分が環境に影響を与えていることへの満足感」が、子供を遊びへと駆り立てるとも言われています。

遊びにおける成功体験によって、子供は大きな達成感や自信を得ます。こうした体験を積み重ねることが、遊びへのさらなる関心につながっていきます。子供たちは、体験を通して、遊びの中で達成感や充実感を味わいながら、学びを深めていくのです。



負けてばかりはいや



【活動の様子】

4歳児は秋から園庭の斜面を利用したかけっこを行っていたが、年長児のリレーに刺激を受けて、自分たちもリレーがしたいと言い出した。

そこで、チームが分かりやすいように保育者が赤白帽子とバトンを用意したところ、子供たちは、「おお、なんか選手みたい」と張り切ってこの活動に取り組むようになる。斜面はかなりのアップダウンがあり、デコボコなので身のこなしが重要になる。少し怖いと感じている子供もいたが、同じチームの友だちの声援を受けて、精一杯の力で斜面を駆け上ったり駆け下りたりして勝負を競うようになっていく。

リレーを始めて3日目。白チームのA児が2回続けて勝負に負けた時、「もうやめる」とその場を離れていこうとする。A児は、「だって、ずっと赤が勝つんじゃないもん」と不満を訴える。すると他の白チームの子供も「そうよ、そうよ」と言い、「ほくも赤チームになりたい」と訴える。「じゃあそうしてみたら」と保育者が言うと、数人が赤帽子に変える。「えー、でもそれじゃあ、人数が合わなくなるじゃん」と周りの子供が言い、「それじゃあ楽しくないじゃんか」と他の子供も言う。「じゃあどうすればいいかな」と問いかけると、B児が「チームを代えたらいい」と提案する。「そうよ」、「そうしよう」という声が聞かれ、チームを代えて再びリレーが始まる。

その後、2回やったらチームを代えるというルールが子供たちの中にでき、自分たちで遊びを進めるようになっていく。

【遊びの中で育まれている力】

- 年長児のようにになりたいという憧れの気持ちを持つ。

遊びを進めやすいように、また、憧れの年長児のようにするために、赤白帽子とバトンを用意することで、意欲を持ってこの活動を行ってほしい。

- 全力で走る爽快感や斜面を上り下りする際の身のこなしを体験する。【うごく力】
- 友だちと力を合わせて、一緒に競う楽しさを味わう。【人とかかわる力】

- A児は、悔しさを味わい、自分たちなりに不満を表現する。【人とかかわる力】

困る経験をすることで、自分たちで話し合っ考えるきっかけにしてほしい。

- リレーを続けるためにはそれでは困ると考え、そのことを訴える。【考える力】

解決策を探る方向に子供たちの考え方をシフトさせたい。

- B児は、現状に対する解決策を考え、皆に伝える。【考える力】

- 必要感の中から、自分たちでルールを考え、それを実践する。【考える力】



この遊びの中での学びを支えたもの

【子供たちが憧れを実現できる環境作り】

子供たちは、年長児のようにやりたいという憧れを持っていた。赤白帽子やバトンという用具が用意されることや、走る場所をみんなで決めることで、共通の認識を持ちながら、気持ちを高めて遊びに入っていくことができた。

【必要感から自分たちで遊びのやり方を考えていくことを支える保育者の存在】

保育者は、困った状態になってもすぐに代替案を出すのではなく、子供たちが困り感や必要感を感じられるように思いを表現させながら、具体的にどうしたらよいかを自分たちで考えることができる援助を行った。保育者が、ルールを決めてそれを与えることも可能であったが、それでは子供たちが自らどうしたいか、どうすべきかを考えることにはならないと考えたのである。自律的にルールを守るようになるためには、自分たちで必要だと感じ、どうすればよいかを考え、それを自分たちで作っていくことが大切である。今回、遊びのやり方を自分たちで作っていくことができたのは、必要感や自分たちで考えることを大事にした保育者の関わりが背景にあったからである。

先生方へ…



年長児のリレーを見て、自分たちも同じように楽しくできていると思っている4歳児ですが、ここに年齢差があり実際はそうもいきませんでした。

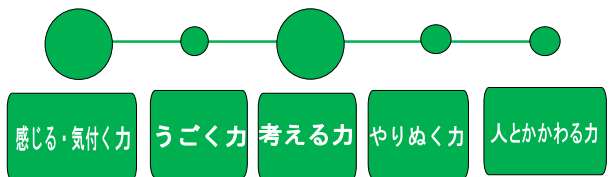
保育者は、ここで何を体験させなければならぬかを見通し、子供たちに考える場を設けています。最初は、「ずっと勝っている赤チームに行き、自分も勝ちたい」という個人的な欲求を通そうとしています。しかし、「人数が合わない」と、競争する際のチームの在り方に気付くようになってきます。集団で遊んで

いるということに気付く、集団で遊ぶことの意味を学んでいるのです。

ルールは、時として子供たちの都合のよいように出来上がっていきますが、保育者はみんなが平等で納得するものに落ち着くよう、時間をかけて関わっていく必要があるでしょう。子供が考えた遊びのルールだけに、時には予想もしないものにまとまっていくこともあり、戸惑うこともあるかもしれません。しかし、子供と共に考えていく過程で、考えがぶつかり合い不都合さに気付く、気持ちを立て直して改めていくことが、人と関わることの大切さを感じることにつながるのではないのでしょうか。



こんな形の氷ができたよ



【活動の様子】

寒い朝、水たまりやコップに残っていた水が氷になっていることに子供たちが気付く。「うわー、氷が出来てる」と歓声を上げ、それを取り出して、「キラキラしている」と見つめたり、「お料理にしよう」と容器に入れたりしている。

その時、A児の手から氷が滑り落ちて、地面で割れる。子供たちは「あー」と叫んだり、「あーあ」と残念がったりしている。保育者がそこを踏んで、「わあ、滑るー」とおどけて言うと、そこから「割っちゃえ」とわざと踏んで割る遊びが始まる。

その日の遊びの終わりに、保育者は「また氷ができたらいいいねえ。どうやったらできるのかなあ？」と投げかけてみる。すると、「水を容器に入れたらいい」、「寒いところに置く」などの意見が出てきて、それぞれが、思い思いに好きな場所に水の入った容器を置いて帰ることになる。

翌日も寒い朝で、みんなで氷ができたかどうか見に行く。子供たちは、「氷ができてる！」と喜んでいる。すり鉢に水を入れていた子供が氷を取り出し、びっくりして「うわー、ギザギザ氷だ！」と叫ぶ。その声を聞いて、他の子供も見に来て、それを触って確かめている。この他にもコップに棒を挿していた氷がアイスクリームの形になっているなど、形の面白さに気付いていく。

保育者も「うわー、面白い、いろんな形ができるんやね」と伝え、昨日は自分の氷を作っていなかったB児に、「他のものでもできるかもね」と言ってみる。すると、B児が「あ！」と保育室に戻り卵パックを取ってくる。その様子を見て、他の子供も様々な廃材などを持ってきて氷を作るようになっていく。



【遊びの中で育まれている力】

- 光に当たって反射する様子に気付き、美しさや不思議さを感じる。【感じる・気付く力】
- 氷が滑ることや割れることを経験する。

氷が割れたことを責める雰囲気になるのではなく、氷が割れたり滑ったりすることにも気付いて、それも遊びとして取り入れてほしい。

- 氷を割ったり滑ったりするという新しい楽しさを味わう。

氷を自分たちで作ることができることに気付き、再現してほしい。

- 自分たちなりに、氷がどうやったらできるかを考え、予想する。【考える力】
- 自分のしたことを確かめる。
- 氷の様々な感触や形の面白さを体感する。【感じる・気付く力】

子供たちの感じている驚きや面白さに共感したい。

B児にも、自分で氷を作る楽しさを味わってほしい。それができると気付いてほしい。

- B児は、自分なりに作りたい形を想像し、どうやったらできるかを考える。【考える力】



この遊びの中での学びを支えたもの

【直接触れて感じる機会の確保】

子供たちが、氷というものをより実感を伴って感じられるように、実際に触ってその冷たさや滑る感覚を味わったり、キラキラと光る美しさを感じたり、割る感覚を味わえるように援助した。そのことが氷に対する興味や関心を高め、さらに関わりたい、作りたいという子供たちの思いにつながっていった。

【驚きや不思議さ、面白さへの共感】

保育者が、子供たちが感じている驚き、不思議、面白さなどに共感することで、子供たちはそれを実感し、さらに興味・関心を深めることにつながっていった。

【自分なりに試したくなる気付きの促しと、試す環境の確保】

どうやったらできるのだろうという保育者の問いかけにより、こうすればよいのではないかという見通しを子供なりに持つことができた。さらに、それを実現するための環境を用意しておいたことが、実際に試してみるという子供の行動を引き出した。

先生方へ…



幼児期には、氷は触るとツルツルする、お日様にすかしてみるとききれい、割れると音が鳴る、解けると形が歪むなど、諸感覚を使い、対象と十分に関わって自然体験を楽しむことが大切です。

また、やりたいことができた嬉しい気持ちや、発見した驚きや不思議に思ったことなどを、保育者や友だちに受け止められ、共感し合うことが、「またやってみたい」、「今度はどうなるかな」と、これからも自然と関わっていきたい意欲を高めることにつながります。

この事例では「明日は冷え込むぞ！」などといった、環境や季節の変化等を敏感にキャッチする、保育者自身の瑞々しい感性や自然の不思議を楽しむ姿、子供たちがやりたいことをすぐに試すことができる意図的な環境づくりがあったからこそ、子供が主体的に自然と関わり、たくさんのことに気付くことができたと言えます。

自然を通した感動体験は、子供たちのさらなる好奇心を揺さぶり、日常生活の中で、霜柱やツララのでき方、日向と日陰、春の雪解け、冷蔵庫と外の氷の違い、氷・水・湯気などに目を向け、天候や気温、季節の変化などつなげて考えるなど、幼児なりの探究心へのきっかけとなっていきます。

